

---

# 視力検査

OR B

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

視力検査

### 【Nコード】

N3725H

### 【作者名】

ORB

### 【あらすじ】

学校の視力検査に引っかかった一人の少年。病院で再検査を受けることになったのだが・・・。

「あー。右」

「まったく。」

「何だっつてんだ。」

「視力はともに2.0、なのになんで再検査なんか。」

「今日は家でゆっくりしようと思ったのに。」

「今まで視力検査になんか引っかけたことなんて無かったのに。」

「今は視力検査の真っ最中。」

「学校での検査に引っかけたり、こうして病院で再検査を受けている。」

「俺が住んでいるのは比較的田舎。」

「肌も真っ黒に焼けていて髪はスポーツ刈り。」

「まさに健康男児の代名詞ともいえる。」

「ゲームだっつてほとんどしないで外で遊んでいる。」

「当然勉強にも手をつけない。」

「よっつて視力がそんなに下がるわけが無いのだが……。」

「コレはわかりますかあ？」

「若い看護婦が最近の女性の話し方で聞いてくる。」

「もちろん余裕である。」

「下です」

「全然見える。」

「こんなことしたっつて意味が無いな。」

「明日学校に文句つけてやる。」

「あれ、おかしいですねえ。」

「学校からの書類にはには視力がともに0.5未満との事だったの」

ですが・・・」

だから視力はまったく問題ないって。

「少々お待ちくださいねえ」

なんだよ。

問題ないんだからさっさと帰らせるよ。

「お待たせしましたあ。」

それではこちらにどうぞお」

なんだなんだ。

別室？

診察か？

部屋に入る。

部屋はいたって簡素で壁一面が白。

それにデスクとその前に担当医と思しき男性。

それともう一ついす。

「ではそちらのいすにおかけください」

なんかおかしい。

なんだ？

ああ、そうか。

医師が一向に顔を上げないから。

じっとデスクの上の書類を見つめている。

相手の顔は見えない。

失礼な奴だと思いつつもいすに座る。

「ええつと。」

なんか学校からの報告が間違っているみたいで。

今からもっと詳しく検査してみますので」

そついうと看護婦に何か指示を出す。

数秒すると奥からさつき使ったランドルト環のボードが運ばれてきた。

が、さつきとは明らかに違う。

ランドルト環のサイズが以上に小さいのだ。

最初のほうは辛うじて見えるが後のほうは裸眼で見えるやつなんているのか？

「じゃあ検査しますねえ」

そついうと片方がふさがれた眼鏡をかけられる。

「これはどうですかあ？」

「あーっと、上」

最初は快調。

数回繰り返す。

「これはどうですかあ？」

「あー・・・」

やば。

さすがに見えなくなってきたな。

「えーっと、右？」

数秒の沈黙。

「ではこれは？」

みえないんだよなあ。

「あー、下」

コレを両目とも行う。

どうやら右のほうが若干視力はいいようだ。

「ハイ、おしまいですよお」

眼鏡がはずされる。

「まあ、こんなものか。」

最後までいくかと思っただがな

視力検査をするに当たって医師は自分の真後ろに位置する。

そこから先程とはまるで違う、

感情が全て抜けたような、何も感じない声でした。

実際にそんな声は聞いたことが無いのでわからないが、

聞くことが出来たならきつとこんな声なのだろう。

この異変に恐る恐る後ろを振り返る。

医師が顔を上げていた。

だがその顔の目に当たる部分は。  
空洞。

まさしくその言葉が相応しい。

それだけをきれいに取り出したかのようになっていた。

「君なら最後までいけると思ったのだがな」

余りの驚きと恐怖に声が出ない。

逃げ出そうにも足が竦み動く事が出来ない。

「あ……うああ……あ……」

声にならない声を喉から搾り出す。

「しかしとてもいい眼だ。」

これで私もはれて自由の身」

声を出すのは大事な事だ。

それによって少なからずとも力が湧く。

「う……ああ……ああああああああああああ！！」

いすを蹴飛ばしドアに駆け寄る。

無我夢中でドアにかじりついた。

が、ドアはまったく動かない。

「くそっ！

何であかねえんだよ！

チクシヨウ！

開けっ！」

ドアを殴る。

「まあまあ、そんなに取り乱さないでくださいよ」

医師が近寄る。

「ああ……くるなあ！！」

身体を押さえつけられる。

医師の指が眼に伸びて………。

少年が入っていった部屋からは一人の青年が出てきた。  
きれいな眼をしていた。

しかし常人には気付かないだろうが、その目玉は左右非対称に動いていた。

青年は振り返ると部屋の中に声をかけた。

「ありがとうございます。」

おかげさまでスッキリよく見えます。

それでは、先生も眼をお大事に。

頑張ってください、新院長」

そこにはただ下を向いていすにすわる男性の姿があった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3725h/>

---

視力検査

2010年10月14日23時52分発行